小寺聡編「もういちど読む、山川、倫理」山川出版社 2011 年 4 月 10 日刊を読む

孔子：思いやりの心

１．孔子(こうし)<前 551 頃～前 479>は、魯(ろ)の国(現在の山東省)で生まれた。魯の司法大臣となって政治改革を試みたが失敗し、その後、諸国をまわってみずからの教えを説き、晩年は故郷に帰って弟子の教育にあたった。孔子の教えとその伝統は、儒教(儒学)と呼ばれる。

２．儒教とは人の生きる道についての教え、道徳のことである。人はつねに他者とともに生きている。人びとがともに生きるところに、人として歩むべき道である道徳が生まれる。孔子は道徳を学び、徳を身につけた高い人格を君子(くんし)と呼び、君子として自己を完成することが、人生の目的であると説いた。

３．孔子は、人が身につけるべきもっとも基本的な徳を仁(じん)と呼んだ。仁という文字は、人が二人いることをあらわし、人と人がたがいに相手を思いやり、親しみあっていることを意味している。孔子は、仁とは「人を愛することである」といっている。また「親への愛情(孝(こう))と年長者や兄への愛情(悌(てい))は、仁のもとである」ともいっている。

４．仁は家族に生まれる自然な親愛の情を、社会一般の人びとにまで広めた、普遍的な人間愛の理想である。このように家族愛を重んじることには、当時の封建社会の風習が影響しているが、家族の絆が見失われがちな現代においても、人が育つ基盤となる家族の絆(きずな)をみつめ直すことは大切である。

５．私たちはたがいに親しみあって生きるために、何を心がければよいのだろうか。弟子から「一生を通じて実行すべきことを一言でいえるでしょうか」と聞かれて、孔子は「それは思いやり(恕(じょ))だね。自分にしてほしくないことは、人にもしないことだ(己の欲せざるところを人に施すことなかれ)」と語っている。恕の字は汝と心の二つの意味からなり、相手を自分のごとく思いやる心を意味する。相手の心は直接には読み取れないから、自分の心を推して人の心を知り、自分に引き比べて人の気持ちを推量することが大切である。

６．人間はつねに相手の立場に立ち、相手の気持ちを思いやる恕の心をもつことで、たがいに親しみ、仁の徳を身につけることができる。これは自分の気持ちの発散だけを求め、それが相手にどのように受け取られるかを考えない、自己愛に傾きがちな現代人にとって大事な教えといえよう。

7．また、「先生の道は真心(忠)と思いやり(恕)のみである(夫子の道は忠恕のみ)」ともいわれている。忠とは、心の真ん中という意味で、うわべのみせかけや偽りではなく、心の中からの誠実さ、真心をあらわす。孔子は「世の中には、相手に取り入る巧みな言葉や顔色(巧言令色)は多いが、心からの愛は少ないものだ」と歎いている。みずからの誠実な真心と、他人への思いやりがあって、はじめて仁が成り立つ。

8．古代中国では、礼はもともと祖先をまつる宗教的な儀礼を意味したが、やがて礼儀作法という一般的な社会習慣になった。孔子はその礼に道徳的な意味をあたえ、相手を思いやる内面の心が、態度や行動となって外面にあらわれたものと説いた。礼は、相手を尊重するていねいな言葉遣いや振舞いの基準、つまり仁を表現する道徳的な規範である。孔子は「己れのわがままを克服して、相手への礼に復ることが仁である(克己復礼)」と述べている。

9．礼に従って相手を尊重するていねいな態度が、仁のあらわれである。作法は違っていても、世界のどの文化にも礼儀があるということは、たがいを人として尊重しあう心を言葉や態度で表現することが、道徳の基本であることをあらわしている。

　孔子は、目先の利益だけにとらわれた人間を小人と呼んで批判し、仁と礼の徳を兼ねそなえた理想的な人物を君子と呼び、君子になることを人生の目標とした。孔子は道徳はもとより、詩や書や礼儀作法などを学び、人間としての教養を身につけ、人格を陶冶することをとおして、仁をそなえた高い人格を形成することをめざした。

10．古代中国では、法律と権力によって人民をおさめようという法治主義を説く、韓非子らの法家がいた。しかし孔子は、法律や刑罰によって人民を厳しく取り締まるだけでは、人民はうまく刑罰を逃れて、恥知らずになるだけだと批判し、道徳によって人民を治める徳治主義を唱えた。孔子は、徳をそなえた君子が為政者となり、仁の徳によって民衆を感化しておさめる修己治人を政治の理想とした。

11．君主がみずから正しくふるまえば、民衆はその徳を慕い、それに感化されてみずからも正しく振舞うようになる。道徳や教育によって人民を導き、礼儀によっておさめれば、人民は道徳的な羞恥心をもち、みずからの不正を恥じて、社会はおのずと正しくなるのである。

12．当時、このような孔子の徳治主義を採用した諸侯はいなかった。しかし、社会の法の秩序を支えるものが、公共性を尊重する市民の精神であると考えるならば、私たちがたがいを人として尊重する態度を養うことは、現代社会においても根幹をなすことである。

13．孔子は、「不思議な力や神秘的な現象については語らなかった(子、怪力乱神を語らず。)」と伝えられている。また、「霊魂のような不思議なものには敬意はあらわすが、遠ざけておくことが知恵である(鬼神を敬して、これを遠ざくるを知というべし)」とも述べている。死について、

「まだ十分に生きることについて知っていないのに、どうして死について知ることができようか(我未(いま)だ生を知らず、いずくんぞ死を知らん)」と答えている。

14. 孔子は神秘的な力や死後の世界など、人間の理性的な理解をこえたものについては、あえて問わなかった。孔子は、理性の判断をこえたものについては、判断をさしひかえて近寄らないことが、理性にかなった態度であるという合理主義の立場をとった。そして、非合理なものに傾倒することや逃避することを戒め、不思議なものに安易にたよろうとする気持ちを抑えて、日々の現実の生活の中で、みずからの人間性を磨き、人として道徳的に向上する努力を求めた。

15. 仁：思いやりの心「子貢(しこう)がおたずねした。『一言だけで一生おこなっていけるものがあるでしょうか』。先生はいわれた、『それは思いやり(恕)だね。自分のして欲しくないことは、人にもしないことだ』(己れの欲せざる所を、人に施すことなかれ)」(『論語』衛霊公(えいれいこう)篇)「先生がいわれた、『参(しん)よ、わたしの道は一つで貫かれている』。曾子(そうし)は答えた、『はい』。先生が出ていかれると門人がたずねた、『どういう意味でしょうか』。曾先生がいわれた、『先生の道はまごころ(忠)と思いやり(恕)にほかならない』(夫子(ふうし)の道は忠恕(ちゅうじょ)のみ)」(『論語』里仁(りじん)篇)

16. 孔子は、中国の春秋時代末期の思想家である。魯(ろ)の国に生まれ、幼い頃に両親を亡くして苦学しながら役人となり、しだいに実力を認められて、40 歳の頃には魯の司法大臣になった。貴族の専制を阻(はば)む政治改革を試みるが失敗し、国を去って諸国を遊説した。しかし、その徳治政治の考えを採用する君主はなく、晩年は故郷に帰り、弟子の教育と著述に専念した。『論語』にまとめられた孔子の教えは儒教と呼ばれる。

P41 ～ 45

[コメント]

「日本史」「世界史」「政治経済」に引き続いて山川出版社から刊行された待望の「もういちど読む」シリーズの「倫理」。ここに書き抜かせて頂いたのは、孔子の思いやりの心、「仁」の精神。本書をテキストにし、昨日紹介させて頂いた同じ小寺聡先生編の「倫理用語集」を参考書にして、学校で「倫理」を履修していないすべての高校生に、高校時代に倫理の基本を学び続けることを期待したい。高校時代に「倫理」を学ばずに、大学には行かない方がよい、社会に出ない方がよい。「倫理」を学ばずに高校を出てしまった人は、是非、本書と「用語集」を用いて一から勉強してほしい。

－ 2011 年 5 月 14 日林　明夫記－